



模型作製の動機

私は現在67歳です。60歳まで都立高校の生物の教諭として勤務していました。ただ、定年後65歳までは嘱託教諭として務めました。現在はフリーです。世田谷区のシルバー人材センターで除草、会館清掃などの作業をしています。

10歳の時から、大森めぐみ教会に出席し、中学3年のペンテコステの日に岩村信二牧師より洗礼を受け、2007年6月に入信50年を迎えました。

1996年3月に、大森めぐみ教会の方々と一緒に「エジプト・イスラエルを廻る聖地巡礼旅行」に参加し、エルサレム旧市街を訪問しました。ちょうどその年が、ダビデがエルサレムに王国の首都を定めてから三千年目にあたり、エルサレム市から「遷都三千年祭記念メダル」をもらいました。その旅でエルサレム市内の「ホーリーランドホテル」の庭に作られた「第二神殿時代のエルサレム」の1/50の模型を見学しました。以前から洋の東西に関わらず、古代都市や城郭に非常に興味があり、この都市模型の詳しいパンフレットをお土産に購入し、時々出して眺めていました。この都市模型は2006年夏に「イスラエル博物館死海写本館」横に移設されました。2010年春に、教文館主催の聖地巡礼旅行に夫婦で参加して、移設された模型に再会しました。

日本にはまだこのような古代エルサレムの模型はありません。教会で使えて、小さな車でも持ち運び出来るものは出来ないだろうかと模型制作を思い立ちました。最初は試行錯誤しながらバルサ材とカッターナイフを用いて、1/1000の大きさに幾つかの建物模型を作ってみました。幸い近眼で眼鏡がなくても手元が見えます。木材や竹串などをナイフで細く削るのが結構楽しいということで決心がつけました。でも、縮尺1/1000だと畳2帖分の大きさになります。そこで1/2000の大きさにして、建物は神殿の丘やアントニア要塞を除き1/500としました。

また、エルサレム市の模型では、城壁で囲まれた市街地のみで、ゲッセマネやオリーブ山などは含まれていませんので、それも入れたい。建物たくさんの都市模型全体となるとかなり時間がかかります。のんびり作り始めましたが、喘息や老化現象など自覚するようになりましたので、65歳の誕生日に完成

させるという期限を自ら定め、約2年で(2008年1月に)完成しました。

模型の材料は、バルサ材(模型用の軽量木材)、紙、紙粘土、竹串、楊枝、発砲スチレンボード、アクリル絵の具、鉄道模型で使う色付スポンジ片、木枠と蓋の透明アクリルボード等です。大きさは90cm x 90cm x 20cm、模型全体の重さは約20kgです。

宗教都市「エルサレム」の概要

エルサレムはイスラエル国のほぼ中央にあり、ユダ丘陵地帯にそびえる丘の上に立地しています。標高約750m前後(箱根芦ノ湖の高さ)の高原都市です。地中海からは60km、さらに東へ20kmで死海(標高差1200m)、緯度的には日本では鹿児島市あたりに位置します。

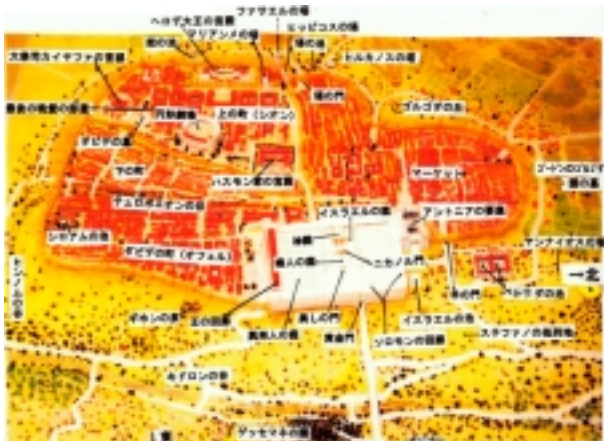
丘陵の地質は淡黄色の石灰岩で形成されています。現在、市内にある建物や石垣は、ほとんどこの石灰岩(エルサレムストーン)で作ることが義務づけられています。土は赤っぽい色をしています。

気候は、温帯で地中海性気候です。夏は乾期で、冬(11月~3月)は雨期です。高原にあり、夏でも28くらいです。雨量は東京の1/3と少なく、爽やかです。すぐ南にはネゲブ砂漠が迫り、死海周辺は砂漠や荒れ野が広がる乾燥地帯です。時には土砂降りの雨も降ります。古代から地下貯水槽に貯蔵し利用され、導水渠などが作られました。数カ所に泉も湧き、4000年前からの歴史があります。

現在イスラエル国が首都と宣言しているエルサレム市の人口は約78万人(面積は120平方km)、城壁で囲まれた旧市街(一辺約1km四方)は人口2.5万人で、中はイスラム教徒地区・キリスト教徒地区・アルメニア人地区・ユダヤ人地区の四つの地区に分割されています。ユダヤ教(世界で1500万人)・キリスト教(21億人)・イスラム教(13億人)の三大宗教(世界人口の半分以上)の聖地として、多くの巡礼者が世界中から集まる宗教都市です。

1967年の六日戦争まで、旧市街がある東エルサレムはヨルダン領でしたが、現在イスラエル国が占領支配しています。1981年に世界文化遺産と危機遺産に指定されました。ただし、東イスラエルの帰属問題は、国際的に認められておらず、どこの国にも属さない唯一の世界遺産です。

イエスの時代のエルサレム(第二神殿時代)



2000年前の城壁に囲まれたエルサレム市街は、今の旧市街に比べて南側に大きく広がっていました。南北約1.5km、東西1kmの広さで、人口3~4万人くらいだったと思われます。建築土木工事が好きだったヘロデ大王(在位BC37~BC4)の時より、市街地や神殿・神域を大改修しました。イエスの時代の後まで市街は拡張され、人口も6万人まで増えたと思われます。ただし、AD70年に、ローマ軍によって徹底的に破壊されました。

東にキドロン谷、南から西にヒンノムの谷が深く三方を囲み、市街地の中央に南北にテュロペオンの谷が走ります。東側の丘に神域(神殿の丘)、ダビデの町があった「オフエルの丘」が、西側には「シオンの丘」があります。



北西の市街、下方がゴルゴダの丘

シオンの丘のもっとも高い所に「ヘロデ王の宮殿」が、高い城壁で囲まれて構築され、宮殿北側には、3本の高い塔 高さ45mの「ファサエルの塔」(兄の名)、4mの「ピピコスの塔」(友人の名)、35mの「マリアンメの塔」(妻の名) が建てられ、要塞の役目をしました。宮殿の門の前にはアゴラ(広場)が、これを

囲んで上流階級の邸宅があり、その南に「大祭司カイファの官邸」がありました。これらが「上の町」です。最後の晩餐の屋敷やダビデ王の墓もありました。

中央南北に走るテュロペオン谷に沿った「下の町」には庶民の家々が並びます。また、その北側市街に市場や倉庫群、職人の町などがあったと思われます。

ヘロデが大改修した神域(神殿の丘)は壮大で、高い石垣(西側485m、南280m、東460m、西315mの四角形)の上に構築され、古代世界でも破格の規模を持っていました。現在でもその区画は残り、丘の上はイスラムの聖地で2つの巨大なモスク(「岩のドーム」「アル・アクサー・モスク」)が建ち、石垣の南西部が「嘆きの壁」としてユダヤ教徒の祈りの場になっています。



南から見た神域、2つのアーチ橋の間が「嘆きの壁」

神域は、四方にいくつかの門、西側には2つのアーチ橋が架かり、出入りができます。神域の周囲は列柱回廊で囲まれています。東北西の3面が「ソロモンの回廊」、南の2階回廊が「王の回廊」で、イエスが商人を追い出したのはこれらの回廊と思われます。回廊に囲まれた広い中庭が「異邦人の庭」で、ユダヤ人以外はここまで入ることができます。祭りの時には10万人以上の参拝者が集まりました。中垣に囲まれた中央の区画には、ユダヤ人しか入れません。

その東側に向いた入り口が「美しの門」(使徒3:1の足の不自由な男をペトロが癒した場所)です。この門から入った中の四角い広場が「婦人の庭」で、女性はここまで入れます。四隅に部屋があり、寶銭箱が置かれていました(マルコ12:41のやもめの献金の場所はここ)。その奥の円形の階段の奥が「ニカノル門」で、コリント銅で作られ黄金のように輝いていたと言われています。その奥が「イスラエルの庭」で、祭司と男子のみが入れます。生け贄の動物を捧げる壇や祭壇がありました。

この神域の中心に建つのが壮大華麗な「神殿」で、高さと同幅は約50mあり、入り口の門を入った内部が「聖所」で、その奥に「至聖所」があり、間は垂れ幕で仕切られていました。イエスの十字架上の死とともに裂けたのはこの幕(ルカ23:45)です。至聖所は暗黒で、ソロモン時代の神殿ではここに「契約の箱」があったと言われています(列王上8:6)。エルサレム陥落後と共に失われ、ヘロデの神殿には何もなかったと言われています。



円形劇場

神域の北西に、4つの塔を持って高く聳える「アントニアの要塞」があり、ローマ守備隊が駐屯していました。神殿を見下ろし不穏な動きがないかを監視していました。ここは現在むち打ちの教会などがあり、イエスの審判が行われた場所です。この要塞の北の郊外に、ベトザタの池があります。この東側の斜面で「ステファノの殉教」が行われた地があります。

市街地は、AD70のローマ軍のエルサレム占領後、徹底的に破壊され、ユダヤ人の立ち入りを認めない時代が長く続きました。その後ローマ風都市に造りかえられたり、キリスト教が公認されたビザンチン時代に大きな教会が幾つも建てられました。イスラム教支配時代(途中に十字軍時代が約100年挟まる)などが入り、何回も破壊と建設が繰り返され、神殿の西側の壁(嘆きの壁)以外は、イエスの時代のものはほとんど失われました。当時の地表は、現在より数～15mも下になっています。

(東京目黒クラブ:2010年12月例会卓話)